

居場所と出番があるホスピスの取組み

朗読者 今村敦子

5 「居場所」と「出番」、人間いくつになっても、どんな境遇に置かれてもこの2つがあることが望ましい、と鳥取市で野の花診療所を運営する徳永進ドクターは言います。医師としてたくさんの方の死を看取ってきた徳永さんは、死もまた豊かなものでありたい、と願うようになりました。「あってはならないもの、見たくないものとして、ともすればネガティブに捉えられがちな死ですが、死もまた人間のひとつの姿であり、豊かでありたい。だからこそ「居場所」とともにいつまでも「出番」があること、これが大切なのだ。」そう考える徳永ドクターは、勤務医を辞め、2001年に今の診療所を作りました。19のベッドを持つホスピスケアを行う診療所です。ホスピスというのは、末期ガンの患者さんなどに安らぎを与え、看護する施設です。医師と看護師、患者さんとその家族たちが一緒になつて人生最期のときを迎えます。

15 野の花診療所の2階にはラウンジがあります。ゆったりとしたソファー、季節の花が飾られ、鳥のさえずりが聞こえます・・・。

20 このラウンジでは、ときどき「お話し会」が開かれます。語るのは入院患者さん、聞き手は看護師だったり事務員だったり、ボランティアさんだったり。時にはドクターも加わります。この時ばかりは、普段はお世話される側の患者さんが主役です。看護師や病院スタッフは聞き手にまわります。

語られるのは、戦争の話、夜行寝台列車のボーイをしていた話、魚の行商の思い出話・・・自分がどんな時代を生きてきたのか、どんな暮らしを送って来たのか・・・、どの話にも、それぞれの患者さんが「生きてきた証」「必要とされてきたという思い出」「人の役に立ってきた自負」がこもります。いくつになっても、どんな境遇に置かれても、安心して暮らせる自分の「居場所」があること、自分が主役となって、自分を語る事ができる「出番」があること、それが、人が人としての尊厳を守ることにつながるのではないのでしょうか。